

# 株式会社立飛ホールディングス

代表取締役社長

## 村山正道氏

### 立川とともに未来を構築したい 浮利を追わず、地域社会のため 立川を世界に認識させたい

聞き手 本誌主幹 大中吉

#### 社有地面積は

#### 立川市の約25分の1

——100周年を迎えられるそうですね

村山 2024年11月1日が100周年です。そして私自身もこの会社に入社して51年目になりました。

——半世紀以上ですね。偶から隔まで立飛のことを存じなのですね

村山 昭和48年に入社しまして、ここまで長く居るとは思ってもみませんでした。

——なぜ立飛に入社されたのですか

村山 私は高等学校、大学と弓道部で主将をやっております、大学の入れ替え戦が12月にあつたために秋のリレーからかきりきりで、就職活動を開始したのは年が明けてからだったのです。就職課に行ったら怒られましたね、そこで立川にこういう会社があると紹介されたのがこの会社だったのです。

——なぜ立飛だったのでしょうか

村山 OBがたくさん居たと聞きました。それまで、この会社が何をしている会社なのか全くわからずにお訪ねしまして、わざわざ駅まで迎えに来てく

だざり、そのまま大敷地を案内していただいたのですが、それが30分ほど掛かりました。それで「どうだ？」と聞かれました、体育会系です

し「はい」とお応えするしかありません。書類を送るといわれてそのまま入社しました。

——ちよつと変わった社名ですが、そもそもは『立飛企業』だったのですね

村山 はい、入社したときは『立飛企業』でした。前身は『石川島飛行機製作所』という名称でした。今の『IH I』が出資し、月島で設立された後に立川の地に移転したのです。

——なぜ立川という場所だったのでしょうか

村山 陸軍の飛行場ができたからです。石川島自体は海軍の会社でしたから、陸軍の御用達で立川まで来たということだと思います。立川飛行場は2022年に開設100周年を迎えました。

——まさしく飛行場とともにあつた企業ですね

村山 おっしゃる通りです。飛行場がなければなかつた会社です。

——どんな飛行機を作っていたのですか

村山 約50種類の航空機を設計製造していましたが、どちらかという練習機が得意だったようですね。

——戦闘機の「隼」もありました

村山 「隼」は「中島飛行機」の OEM でしたが、記録によれば約5700機作られたうちの2494機は当社で製造しています。しかしそもそも当社の基盤を作ったのは「九五式一型練習機」いわゆる「赤とんぼ」です。2



村山正道 氏

——第2次大戦が終わるまでは国策とともにあった企業なのですね

村山 大正13年から昭和20年までの21年間はそうですね。当時の会社経理応急措置法により昭和21年〜昭和30年まで特別経理会社に指定されておりましたが、調べてみたら思い

398機作られて、それによって会社の財政基盤が作られたといわれています。

——そもそもは練習機が始まりだったのですか

村山 練習機が得意だったのは事実ですが、A・26（キ77）は東京からニューヨークまで無着陸で飛べるという航続距離の長い機種で、当時世界記録を樹立していますが、戦時中なので記録としては残っていません。

——大変な距離ですね

村山 戦時中、米軍が最も畏れた日本の飛行機といわれていますが、残念ながら2機しか作られておりません。

のほか財政状態が悪くありませんでした。技術を残すという意味で「新立川航空機株式会社」という第2会社を立ち上げてはいたのですが、本体の立川飛行機は懸念されたよりも財政状況が悪くなかったために存続が認められ「立飛企業」として残ったということなのです。

——そこで再スタートを切ったわけですね

村山 当時は広大な土地が国に接収されており、いま本社のある栄地区と呼ばれるエリアで製造工場やガソリンスタンド、整備工場などを経営しておりましたがなかなかうまくいきませんでした。ところが、当時の川崎淑男さんという方が資料を集めてGHQと

交渉を重ねたのです。じつはGHQは接収した土地が国有地だと勘違いしていました、それが民間の所有地であることが確認され、国から賃料が入るようになったのです。この川崎淑男さんは、立飛中興の祖だと私は思います。

——かなり広いですね

村山 『立飛グループ』が所有する土地面積は、立川市の総面積の約25分の1を占めていますからね。

ものづくりから街づくりへ

——戦後の厳しい時代を乗り切れたのはその土地のおかげですね

村山 航空機を製造していた技術がありましたから、戦後は洗濯機を開発したりしましたが、なかなかうまくいかなかったようです。

——洗濯機ですか

村山 噴流エアレーター方式という、特殊なプロペラと水と空気を使った噴流を起こし泡立ちが良く、布のねじれが少ない優れたものだったようですが、大ヒットとはいかなかったようです。

——飛行機の流体力学を応用したのでしょうね

村山 おそらくそうだと思います。さ

らに電気自動車まで開発しましたが、なかなか思うようにはいかなかったようです。

——電気自動車は今やっつていけば最新技術でしたね

村山 まあ、飛行機製造の技術がありましたからね。後に日産自動車に統合されたプリンス自動車の前身もわが社から生まれたのですよ。そのほかにも三輪自動車、消毒器、自動車用のヒーター、さらに整備等で使うリフトまで手掛けています。

——その時代は飛行機製造のノウハウが生かされていたのですか

村山 かなり普及したのは機械式の駐



昭和54年 当時の社有地



昭和記念公園に隣接する複合施設  
GREEN SPRINGS

**村山** 立川市の発展と未来のために役立てることが大きな役割だと考えての展開です。

——商業施設ができ、モノレールが走り、近代的な都市になってきましたね

**村山** 飛行機作りから始まった「立飛」のものづくりの情熱が、不動産業という舞台で「街づくり」そして未来に向けての都市計画へと発展してきたわけです。

### 地域に貢献できる

#### 「立飛」でありたい

——在籍51年と伺いましたが、主にごのようなお仕事をされていらしたのですか

**村山** 経理に32年おりました。その後5年ほどは総務部長にもなりましたが、そこでも経理は見えていたのですが、そこでも経理を経験してきました。37〜38年は経理を経験してきました。

——ちょうどバブル期ですがファンド等の影響はいかがでしたか

**村山** 株の持ち合い等の状況があり、「立飛」という会社の姿を見るためには「新立川」を見なければならず、その逆もあるところに、さらに非上場の

子会社が絡むことになるために、アクティビストからは企業価値が極めて見えにくい状態になっていたのです。

——投資ファンドの介入はなかったのですか

**村山** もちろんありません。かのエフィッシモも来ましたが、私は逃げることなく会って話をし、この会社の未来像を伝えました。

——当時の経営状況はいかがでしたか

**村山** 正直なところ、お金の使い方が下手な会社でした。よく、利益を出して法人税をしっかりと収めることが企業の社会貢献と言われるのですが、それは地域の皆さんには何も見えないし伝わりません。「立飛さん、立派です。ありがとうございます」とは言っていただけなのです。立川市の中心部に市の面積の約25分の1を占める土地を保有する企業は、しっかりと地域に貢献することが大切です、そのことをお知らせしなければなりません。

——地元に古くからある企業としての責任でもありませんか

**村山** 減価償却の終わった築80〜90年という建物なので、売り上げにおける収益率が他に例を見ないほど優秀だったのです。これまでは、それがいつま

でも続くと思っていたのかもしれないが、それが平成26年に降った大雪で、倉庫の屋根の一部が崩落したのです。

——2週続けて大雪が降ったときですね

**村山** 私が社長になってから、その古い建物を建て替えるなり、補修するなり、さまざまな方法を考えましたが、どうせやるなら地域の皆さんに喜んでいただける、地域に貢献できるプランやモノづくりにしていこうという考え方ですね。

——そこが御社の特徴ですね

**村山** グループが持つ一体資産を開発して地域社会に貢献するので協力していただきたいと、非上場になるときに株主の皆さんとそのことを約束しました。その約束を粛々と果たしているだけだと考えています。

——地域とともにあるという姿勢ですね

**村山** 「立飛」が持つ資産をいかにして地域社会の未来に繋げていくかが大切ではないでしょうか。いまま多くの経営者の姿は、前年同月比の売り上げといった数字を気にするばかりで未来を見据えて今を考える姿になかなかない傾向があると思

車装置でした。よくマンションなどに設置されている立体駐車場ですね。長

年培った技術を生かしたものづくりをしてきました。一方、1970年代に入って、米軍が接収していた西地区、東地区、南地区が返還されてからは、それを契機に不動産事業も強化するようになりました。

——広大な土地という資産が還ってきたのですか

**村山** 倉庫をリニューアルして賃貸用として事業を拡大し、さらにオフィスビルや結婚式場、店舗、ショールーム、そしてスポーツ施設やレジャー施設を手掛けるようになりました。

——大きな方向転換ですね

ます。銀行の融資も未来の夢より売り上げの数字ですからね。

## ——立川あつての立飛ですね

**村山** 98万㎡という広大な社会資本財としての土地を保有していることを認識し、それをどう開発し、地域社会の未来に役立てるかが大切だと思えます。これまでなかった芸術、文化、スポーツの施設を拡充することは、地域の活性化にとつてとても大切なことだと考えています。

## ——2017年にアリーナができましたね

**村山** 2015年にプロバスケットボールのBリーグが設立され、2017年に「アリーナ立川立飛」ができたときに、ちょうど大坂なおみ選手がテニスの全米オープンで優勝し、その凱旋試合として「東レ パシフィック オープンテニストーナメント2018」のスペシャルイベントが、「アリーナ立川立飛」「ドーム立川立飛」で行われたのです。町に人があふれ、やつと立川が全国区になったと実感しました。

## ——基地の街というイメージでしたからね

**村山** まあ、もともと滑走路と格納

庫以外は何もない場所でしたからね。そこに大坂なおみ選手がやって来て、Bリーグの「アルバルク東京」が来て、サッカーのFリーグ「立川アステック」が来て、卓球のTリーグやバレーボールのVリーグ等が来ることになり、一気に全国に知られるようになりました。

## 芸術、文化、スポーツの街づくり

## ——ここでも100年後の「立飛」と立川はどうなるとお考えですか

**村山** 100年経ったからすぐに次の100年とおっしゃいますが、そんな先のことは見えないと考えています。まずは50年先にこんな風になっていたいというのなら想像がつきますから、50年先の立川がこんな風になっていたら良いというイメージを考えるのであれば、今の環境を基盤に考えることが可能だと思います。

## ——今を基盤に近未来に照準を当てるのですよね

**村山** ます、ここには「昭和記念公園」という素晴らしい公園があります。そ

の美しい公園を囲むような街づくりができればと思います。立川、昭島、武蔵村山が合併して、芸術、文化、スポーツの街づくりを大規模に推進できれば世界にも認められると思います。

## ——立川を基盤に世界へですね

**村山** もはや「東京」ではないと思います。「立川」を世界に発信することが肝心であり、どこから来ましたか：と聞かれて、「東京」ではなく「立川」と答えられるようになりたいと思っています。

## ——そのための芸術、文化、スポーツであり施設なのです

**村山** まだまだ自分がやりたいことの

2割もできておりませんが、未来に繋がる街づくりを推進しながら、世界にここ「立川」を認識してもらいたくようにしたいと考えています。

## ——東京に直下型の地震が予想されています

**村山** なぜ立川に飛行場が作られたか。それは地盤がしっかりしているからなのです。東日本大震災の時に沿岸部で液化化が起こり、立川に移転するような話もいくつかありましたが、喉元過ぎれば熱さ忘れるでしょうか、最近騒がれなくなりました。ただ、府中と飯能を結ぶ断層が「立川断層」と呼ばれているために、立川のイメージは著しく悪くなっているように思います。調査をすると、立川には断層は通っていないらしいのですがね。

## ——最後に経営におけるポリシーをお教えいただけますか

**村山** 基本的には「損して得取れ」という考え方ですね。良い取り組み、良い施設には必ず人がついてくるし、逆に儲けようすればするほど離れていくものだと思います。浮利を追わずの精神ですね。

## ——今日はありがとうございました



アリーナ立川立飛